



もど子と人婦

號壹拾第卷五第

もど子

金次のはなし(ついで)

やまとの翁

さて金次は獨り残って、お晝の
 用意をして居ますと、以前の小
 人が、又何處からともなくすー
 っと這入ってきて、そして前の
 様に、お晝を少しくれないかと

言ひます。金次は「はあ、此奴だな、毎日の様にやつて來ては、子
分共を苛めるのは」と思ひまして

「やるものかい、取りたければ腕づくで取つて見るがいゝや」と
と申しますと、小人は不意、金次の首を目がけて飛びかゝつて參
りまするのを、金次は、忽ち身をかはして、小人を取つて抑へて、
すぐ用意の細引を取つて、後手にしばつて、庭の大木に身動きの
出來ぬ様に、しつかりとくゝりつけました。

「さあ、どうだい動けるなら動いて見い」

と言つて、又元の處へ歸つてせつせと用意をして居りました。

其中に三人の子分が歸つて參りました「どうだらうな、金次先生も
強いには違ないが、小人に遭つては叶ふまいぜなど言ひながら、

家に這入つて見ると、何も乎もちやんと出来て、金次は平氣な顔で待つて居る。三人は

「や先生 たゞいま、どうでした、何も變つた事はございませんでしたか」

と尋ねますと、金次は

「さてくお前達といつたら、から意氣地が無いじゃないか、なんだあんな小人に善い目に遭つてさ、まあ飯でも食べて、庭へ行つて見ろい」

と申しますので、さて暫くして四人で行つて見ますと、これは不思議、あれほどしつかり縛つて置いた小人の影も形もございません、夫許りか縛り付けた二抱へもある大木までが見えない。四人

はこれには驚きました。小
人は、其大木
を根引にして
後手にくゝら
れた儘、引き
づつて走つて
行つて仕舞つ
たのでありま
した。
そこで四人は、



「それ追っかけろ
といふので、木
を引きずつた跡
を目宛に追つか
けて参りますと
だんく山奥へ
深く這入つて行
つて、とうく
深い深い洞穴の
處で、跡が見え
なくなりました。

金次は

「や、此中だく、幸ひ、此處に籠と綱とがあるから、己は一番これに乗って洞穴へ下りて見よう、貴様たちは上に居て、己をつり下げて呉れるんだよ」と言つて直用意にかゝりました。

然し、己が下から綱を引いたら最後、すぐに引き上げて呉れなければ行けないよ」と

と言ふので、金次は大きな刀を腰にさして籠の中に這入りますと、「よしきた」と言ふので、三人は、深い穴の中へ金次をつり下げました。

さて、金次は眞闇な穴の中を下へ下へとつり下げられて行きました

たが、とうく底に届いたので、いきなり飛び下りて見ると、俄
 に其處等は明るくなって、丸で闇から晝に變った様です。これは
 妙だと思つて見渡して見ると、其處は奇麗な野原で、畑には菜の
 花が奇麗に咲き亂れて居る、此方の方には美しい谷川がちゃぶち
 やぶと流れて居る、そして直前には、立派な城門が立つて居ます。
 「こりやいよく妙だわい」と思つて、幸ひ門が開いて居ましたから、
 ずんく其中に這入つて参りますと、中には年の若い美しいお姫
 様が、たった一人立つて居りました。そして不思議相に金次を見
 て居りましたが、やがて、

「お前さんは誰だか知らないが、此處は人間の來る處ではない、
 此お城の主人は八頭の大蛇といつて、それはく強い恐ろしい妖

怪けの様ようなもので私わたしは、いつぞやから、此處こゝに盜ぬすまれて來たものだが、お前まえさんは早く歸かへらないと、飛とんだ危あやい目に遭あひますよ」と親切しんけんに言いつてくれました。これを聞きいて金次きんじは、

「こりや面白おもしろい、それでは其大蛇そのだいじやと一番勝負いちばんしょうぶをして、お前様まえさまの身みを助たすけて上げよう、なめに八頭やまただらうが、九頭ここのまただらうが、己おれに取とつては世よの中に恐おそろしいものなした」と言いつて、じつと待まって居まりました。暫しばらくすると、さーつと一ひと吹ふき大風おおいがやつて來たと思おもふと、城門やしろもんも引ひっくり返かへり相あいな大きな音おとがして、にゅーつと顯あらはれて來たのはかの八頭やまたの大蛇だいじやです。金次きんじを見みるといきなり血ちの池いけの様ような八つの口くちを開あけて、劍けんの様ような齒はをかっくくくと皆みな一所いっしょに噛かみ合あはしてやつて來た。金次きんじは少すくし

も騒がず。

「己は金次だ、さあこゝで勝負をしよう」

と言ふと、大蛇は

「小癩なことを言ふ、少し足りない様だが、貴様を晩飯の御馳走に食べてやろう」

と言ふので、八の口から一樣に火の様な舌をぺろりくくと出して、金次を目がけて飛びかゝるを、金次は右にかはし左にかわして戦

つて居ましたが、とうく八つの頭を一々斬り落して仕舞った。

先き程から、心配相にこの勝負を眺めて居た、お姫様は、首尾よく大蛇の殺されたのを見て、いきなり金次の側に來て、涙を流して喜んで居りましたが、やがて

「幸ひ私丈は助けられましたが、二人の妹はまだこの奥に捕はれて居ます、そこには、この大蛇よりも、もっとく強い恐いのが居るのですが、どうかお序にこれもお助け下さいませす様に」と申しますから、金次は「宜しい、大丈夫助けて上げ様」と言ひますと。お姫様は、大層喜んで、奥から一本の金の鞭を取つて来て、「これは大蛇の寶物ですが、これを持つて居れば随分不思議なことも出来、助けられたお禮に、これを進上致しますから、試しに、一度この城を打つて御覽なさい」と申しますので、金次は、何氣なく受け取つて其通りして見ます、立派な大きな城が、忽ち小さな林檎の實に代つて仕舞つたので、金次は、「なる程これは妙だ」と言つて、其林檎を懐に入れて仕舞ひ

ました。

さて、金次は、又お姫様に案内せられて、奥の城へやって参りま
すと、其處には、妹婿が一人捕はれて居たのですが、今姉さんが
金次を連れて見えたのを見て、非常に喜んで、すぐ奥へ行つて、
大蛇のシャツを持って来て金次に着せました。このシャツには不
思議な力があつて、誰でもこれを着るといふと、以前よりも二倍も
強い人になれるといふのです。さて、金次は其下着を着て待つて
居ると、忽ち其處等が動き出して來たと思ふと今度は、十二の頭
の大蛇が、恐ろしくうねり出して來ました。然し、金次は、彼の
シャツで以て、以前より倍も強くなつてゐるのですから、何の苦も
なく十二の頭を悉く斬り落しました。そして其お城も亦、林檎に

代へて仕舞つて、懷の中に入れて仕舞つた。

さて今度は、いよく第三の城へ向ふことになつて、二人のお姫様に案内せられて行きました。この城に居るのは、十八の頭を持つてる大蛇だと申すことです、然しこの大蛇が時々、地面の上に出る時は、たゞ一の頭丈が行く、其一つの頭といふのが、即ち前の小人なんです。金次はお姫様から、それを聞いて、「さては」と思つて、待つて居ますと、其處に捕らはれて居たお姫様は、大急ぎで奥から、一つの頭巾を持って来て金次に呉れました。この頭巾を冠るといふと、十層倍の力が付くといふことなのです。暫くすると、奥から眞黒い雲が起つて来て、天地も壊れ相な大きな響を立て、出て來つたのは、其大蛇です。金次はこれを見て、

「やあ、金次を見忘れたか。前はよくも逃げ居ったな、今度こそは逃がさない、さあ尋常に勝負しろ」

と言ひますと、大蛇は

「やあ、前は油断をしてやられた、今度こそは兄弟分の敵だ、覺悟しろ」

といつて、恐ろしく十八の頭を振り立て、金次を目がけてやつて來るのを金次は、片端から其頭をことくく打ち斬つて仕舞つて、さてこの城も林檎に變へて懷中に入れました。

そこで、首尾よく大蛇を退治して、三人のお姫様を連れて、洞穴の出口まで戻つて來て、先づお姫様を三人一度に籠の中に入れてさて合圖をしますと、上から忽ち引ぱり上げました。

上に居た三人は、金次と引き上げたのが美しい三人のお姫様でしたから、さあ驚いた。これは金次先生屹度小人にやられて



仕舞って、小人が三人のお姫様に化けて吾々をも引き下しに來たのだなと思つて、一度に逃げようと思つて、お姫様たちは周

章て、譯を話しましたので、「そうだったか」と初めて安心して、又籠をつり下げて、金次を引き上げました。

そこで、金次は無事に穴から戻つて出て、さてお姫様達を各自の家へ送り届けて、自分は元の處へ来て、懷中から三の林檎を取り出して、夫を金の鞭で以て又元の立派なお城に返して、そこで三人の家來と一所にいつまでも面白く住んで居りましたといふことです。めでたしく

